

研究室のあれこれの事(一)

今井, 源衛
九州大学教授

<https://doi.org/10.15017/10525>

出版情報 : 文献探究. 8, pp.78-82, 1981-06-07. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

研究室のあれこれの事(一)

今井源衛

四半世紀の間勤めてきた九大も、もうあと残すところ一年ということになって、やはりそれなりに感想は湧くものである。桜の花を見ても、何となくあらたまつた心の動きをおぼえて、我ながらおかしくなる事もある。

その若干の感想めいたものの中に、これまで長い間、いっこうに大学とか、大学の教官とか、また学生というものについて、深く考えてみたことがなかつた——と言えば嘘になる、たしかに大学紛争の頃などには、いろいろと考えることは考えてみたものだが、その時々には追われて、自分でその考えをまとめるという事はした事がなかつた、従つて、結果は深くは考えなかつたのと同じになつてしまつた、という事に気がついた。それは考えなくても、たいしてさしつかえなかつた、ほんやりしていても、おむね日は無事に過ぎていった、という

事が主因であろう。またそれでよかつたとも思う。

しかし、今、四半世紀の間私と私の家族とを養つてくれた職場について、そんなにあいまいな考えのまま去るのもいかかか、という気もするし、特に研究室のさまざまの事について、この辺で、自分なりに考えをまとめる事も悪くはないだろうとも思う。もちろん、書かでもの事かもしれない。第一、思い出しても顔の赤くなるような失敗は教限りない私だから、書くこと自体も苦痛でないわけでもない。しかし、とかくの事はあるにせよ、この辺でキリをつけておく事は、私自身の始末書作成の意味もあり、それが学生諸君にも、何かの参考になるかも知れぬ、というふうにも考えられる。そう思つて、ペンを執りはじめたわけだが、やはり気が重い。その一つは、これを読んだ人たちが、特に学生諸君が、妙な誤

解をしないかという怖れである。

その為にあえて断り言を加えれば、以下に書く事は、今まで私自身さほど意識してはなかつた事で、今あらためて考えてみて、はじめに気付いた事が多いのである。私の心情的経験を書くのではなく、今、事柄の論理を整理してみればこうなる、というだけの事である。そのためまた、問題の骨格だけをおさえて、それが波及する教官・学生両方の情緒的側面については、無視する事にする。勢い表現は赤裸々で、時に卑俗と感ぜられる事もある。しかし、それを今さら怖れなければならぬほど、平常から私が上品な出来でない事は、本誌の読者の多くは、あるいは先刻御承知かと、やや甘えたところのあるのも、お許し願うことにする。

次に、書く内容は、研究室のことに限るが、研究室には、物と人との両面がある。書籍の冊数とか年間圖書予算とか、机・椅子の数とかは前者であり、教官・学生などの問題は後者である。前者については、ここでは取り上げない。その理由をわざわざ

ご申述べることもいろいろまいが、明治以来の国の方針が実学偏重に徹してきたし、今後ともそうであろう、という事だけいえば、あとは余分だろう。もちろん腹は立つ。しかし一方省みれば、私の場合など特に、平安文学の研究が昭和の日本の世道人心に直接益ありという自信はほとんどないし、ほか

の分野でも似たりよつたりだろうと思う。表面では研究費の乏しいことをぶつぶつ言いながら、内心では「何しろ道楽で飯を食おうというのだから、我ながらふてえはなしだ、それが冷やめしでもやむをえぬ」など、諦めているふしがある。そんなあきらかの益々事態を悪くしている事は争えないにしても、また考えてみれば、洋の東西を問わず、それが学問・芸術の宿命的な在りかただという気もするのである。

で、そんな物の面は止しにして、書きたいのは人の面である。予定としては、

- 一 教官と学生の関係
- 二 教官
- 三 助手
- 四 学会・機関誌など

というふうにならうか。

事からは、大学一般にも共通する点が大きいのだろうが、私はよその事情はあまり知らないし、知っていても、あまり役には立つまい。あくまでも、九大の研究室の内部を中心として問題を探してゆきたいと思つてゐる。

一

研究室の人間関係の基本的な区分は、いうまでもなく教官と学生、古風にいえば「師弟」関係である。元来が赤の他人で、その年齢もかなり違う。私のように、我が子さえ持てあましてゐる人間が、他所さまの子で、見ず知らずの青年を相手に、はたしてうまくやってゆけるのか？ もともと問題が起らないのがふしぎなくらいである。

ところが、私の経験でいえば、大学教師と名の付く身分になつて三十年近くなるが、さしたる問題は起らなかつたように思う。例の大学紛争を間に挿んである。何も、私自身が結構な教師だつたわけではもちろんない、むしろ短気で、狭量な点では、学

生にとつてあまり歓迎されない方だろうと自覚もしてゐる。私はただ、ふつうの大学の教師なみの事をやって来たに過ぎぬ。だから、私にさしたる問題が起きなかつた如く、他の教官たちにも、おおむね問題は起きなかつたのである。それは、ふしぎといえふしぎである。

私は、無事に事態が経過する原因は、やはりこの「師弟」の関係自体の中に潜んでゐると思ふ。この関係について、世間では、何でもないあたりまえの事のように受け取られてゐるけれども、あらたまつて考えてみると、いかにも当節としては、珍しく、また不思議な関係なのである。

もつとも以下の「師弟」の意味は、単に同一学校の先生と生徒、教師と学生という意味よりももうすこし狭く、ここでは大学の研究室内における師弟関係の意味で話を進めたいのだが、その場合、教師が学生を研究者として育て上げるとは、どういふことなのか。

その行為をさして、普通、「後継者を育てる」ということが多い。それは、他の職

業分野でいえば、大工が徒弟を一人前に仕上げるとか、商店主が雇った小僧を手代―番頭と育て上げ、さらに分店を持たせて独立させる、という類のものである。要するに、同業者とひとり作り上げるのである。

一般に、資本主義による競争社会である現今の世の中では、同業者は即競争相手であつて、競争相手となる者の芽はいち早くつみ取るのが勝ちである。徒弟制度の場合には、もちろんそのような事はなく、親方は子方の面倒を独立するまで見てゆく。しかし、この場合でも、独立に当つては、親方にあらわな不利をもたらさぬように、さまざまな契約を交わすと聞く。また徒弟制度の場合には、弟子として入門すれば、それ相應のしきたりがあつて、必ずしも親方の一方的な負担によつて、事が運ばれるわけのものでもない。また徒弟奉公の間における弟子の労働は、おおむね親方の収入源に組み入れられ、搾取といえはいえる形ともなるのが普通である。独立に当つてのかなり厳しい契約は右述の通りだが、その先も、しばしば主家との間に顧客をめぐる悶着

が起るものらしい。

ところが、「師弟」の関係は、常にそれらと大違いである。「師」なるものの収入は、ほとんど常に、自らの俸給と、ペンを執つて一コマづつ理めてゆく筆稿労働によつて得たものであり、まずは、「弟子」なるものの労働を搾取するものではない。むしろ逆に、「師」は「弟子」から、不斷に吸いとられる仕組みである。たとえば、家族の生活を犠牲にして入手した資料も、学生の研究資料として役立つとなれば、進んで貸し与えるのであるが、それが卒業論文に関わるものであれば、下手をすれば、半年以上、論文を書き了えるまで手許に戻らず、戻つたかと思えばじきに、また次の年の学生が借り出しにくる。本によつては、こうして、一年の大半は手許に姿を見せぬものもある。その間、事故で紛失する事もないわけではないし、本人に弁償を求められるわけにもいくまい。また、研究会を持つといつても、その為の基礎資料は、ほとんどこちらで手配し入手しなければならぬ。その他論文指導に夜を徹したり、投稿先や

図書館・文庫・知人への紹介など、俗事を書き並べるのもおぞましい限りである。

特に就職の世話に至つては、教師の頭痛の種である。学生の就職のためには、かなり長期の目当てをもつ事が必要で、その間にいろいろと気をつかわねばならない。近年は「公募」形式が多くなつたが、これとて、内実は既に有力候補者を決めていて、形式だけ整えるという場合も多く、「あて馬」にされている事を知らないで、馬鹿をみることになつて、その辺の情報にも神経を使わねばならぬ。長距離電話を度々掛けたり、直接足を運んでみたり――しかしこの迂余曲折する経緯の大半は、学生本人には知らされないのが普通である。

こうした教官の立場を「手配師」にたとえる人もいるが、しかしこれは大まかはいだ。手配師は労働者の賃銀の上まえをはねてもうけているが、教官は、ひたすら持出しばかりである。だからといって、持出しがないように、あれこれの費用を学生に請求したら最後、彼は教師であることを自ら廃業するほかなくなるだろう。

もつとも、学生に教官が助けられるという事もないではない。その著書の校正や索引作りを手伝ってもらったりすることである。それ以上の場合も、人によつてはあるかも知れないが、おのづからその限度はタカが知れている。大局的にいえば、とにかく、わが力を尽して一人の研究者を学界に送り出す、というのが教師の務めなので、そこに教師としての成否・哀歓のすべては賭けられてゐる。門を出てゆく学生がいわゆる後継者に晒するか否かは知らず、また彼が犬や猫でなく、虎や狼である事を教師は望むけれど、虎はしかし、時には、門を出てふりむきざま、何時なんどき教師をばくりとやらないとも限らない。しかし、教師は、むしろこうして、自分を倒し、頭の上を踏み越えてゆく青年の後姿に、心からの満足を感じ、祝福を送る。それが義務だといえ、それまでだが、要するに、どう見ても、底ぬけのお人よし集団である事に間違ひはない。しかし、学問は昔からそういうお人よしによつてのみ守られてゆくものなのだ。

かつて、さる大学の某教授は、ふだんからやや偽悪趣味の傾向があつたが、ある時、学生を前にして、

主任教授のぼくは、君たちの生殺与奪の権を握つてゐる。

と、冗談まじりに、胸を張つた。忽ち学生はいきり立つて大学紛争の火種の一つになつたという。教授の言動が不謹慎かつ軽卒であつたことはもちろんで、学生が腹を立てるのも尤もな点はあるが、しかし、事柄の実体を考えれば、むしろ滑稽なのである。「生殺与奪の権」云々と言つたところで、「殺」はもとより学生から「奪」うべき何物もないはずで、この教授もまた文学部の教授であるかぎりには、おそらくは、右のような無償の行為に終始してゐたにちがひない。むしろ逆に常に「奪」われる立場にあつたといふべきだ。学生がこうした反応を示したについては、別に他に何か理由があつたのかもしれないが、右のやりとりだけからみれば、あるいは、日頃から潜在的な被害意識をもつてゐた教授の、潔癖である事の自信過剰と、学生との師弟関係に甘え

た逆説的言辭がこの災いを招いた点もあろうかと考えられる。年若い学生たちには、そこまで察してくれと望むのは無理というものだが、実利に無縁な文学部教官が往々見せる古めかしい姿勢には、この種のものも少くはないように思われる。

もつとも、こういう関係が、とかく封建的な人間関係と誤解され、また事実やういもの温床になりやすい点もある事は間違ひない。しかし、それを無理に変えて、何もかも合理化、ないし近代化すればどんな事になるか。

大学紛争のころ、紛争学生の甘えにほとほと手を焼いたあまりに、大学の近代化といふことかききりに叫ばれたことがあつた。教育と研究とを切り離して、教育面では、教師は知識の切り売りに徹する事にしよう、というのである。しかし、結局それは実現しなかつたし、大学の教育体制は本質的には、紛争前も後も全く変りはない。

こまかい問題は色々あり、私も現体制が最善とは考えない。しかし、右のような近代化がもし実現すれば、それは大学の教育

にとつて致命傷となりかねないだろう。大
学が変らなかつたのには、それだけの理由
があるものであり、その最も大きな点は、左
に述べたような、教師と学生との間の、い
わば無償の奉仕作業によつて支えられ、そ
れが両者の信頼関係を成立たせていること
にあらうと思う。

右に述べたさまざまのことは、私が、だ
から困る、といおうとしてゐるわけではな
く、これでしかやつていけないのだ、とい
う意味のものである事は、理解してもらえ
るだろう。(未完)

——九州大学教授——

会 員

飯倉洋一	高山倫明
稲川順一	田坂憲二
大木桃子	田中潤子
大橋百合子	中條順子
小野望	中原豊
柏原卓	中村萬里
上村朗子	榎田良照
辛島正雄	野口義廣
木部暢子	花田俊典
国生雅子	花田富二夫
坂口至	福井迪子
崎村弘文	望月正道
白石良夫	矢野準
園田豊	山県浩
高橋敬一	和田勉

編 集 後 記

「文献探究」第八号をお届けします。

○ 今号は国語学三編、国文学三編の論考を
載せることができました。もつとも、最近
入会したメンバーの投稿が一編もなかつた
ことは、反省すべき事だと言わざるをえま
せん。

○ 今井先生より「研究室のあれこれの事」
という文章を御寄稿いただきました。「文
庫訪問の心得」とは、また一味違った御発
言かと思えます。

○ 次号は、十二月初旬刊行の予定です。

(飯倉記)

〈題字〉今井源衛教授
〈表紙〉三好清一氏